

## 戦争に対する宗教の立場についての私見

天理教リヨン布教所長  
藤原 理人 Masato Fujiwara

この原稿を書いている3月2日現在、ロシアによるウクライナ侵攻が続いている。当然フランスに住む人々にも大きな衝撃を与えている。飛行機で3時間の、1週間前まで自分たちと同じような日々を過ごしていたであろう国が突如激しい戦闘に巻き込まれたのである。この恐るべき事実、筆者もまたショックが癒えないままこの文章を打ち込んでいる。この連載はライシテをテーマにしているが、ライシテは宗教と人類の歴史に深く関わっている。この悲劇を前にして、戦争に対する宗教の立場について少し考えてみたい。

歴史上、宗教が紛争の原因となり、多くの悲劇を生み出してきたという意見を何度となく耳にしてきた。とはいえ、20世紀以降、宗教の政治力が弱まっているにも関わらず、一向に紛争や戦争がなくなる気配はない。いままも宗教の名を借りた暴挙は枚挙にいとまがないが、果たして現在、宗教が第一の原因となっている紛争はいくつあるだろうか。20世紀最大の悲劇である第2次世界大戦は、宗教が直接の原因であったとはいえない。今回のウクライナ侵攻も宗教が問題ではないだろう。今後、純粋に教義や信仰実践の問題が理由で戦争や紛争が起きることはもうないのではないだろうか。たとえそのように見える戦争や紛争が起きたとしても、実際のところは政治的な思惑や経済的な利益がつきまとい、二次的な理由や民意の誘導のために宗教が利用されているにすぎないのだ。つまり、宗教の影響力が強くても弱くても戦争はなくならない。宗教によって争いが起きるわけではないと、現代になってようやく証明しているかのようだ。

残念ながら私たちの歴史は未だに、戦争の原因が宗教や人種、政治や経済でなく、人間の自己中心性にあることを示し続けなければならない段階にあるようだ。この人間の自己中心性を戒めるのが宗教の役割ではないか。だからこそ、宗教の政治力は後退してもよいが、社会における存在感は失ってはいけないのである。フランスも日本も脱宗教化が進んでいるが、既存の宗教団体は信仰体験によって、個人的な心身状態だけでなく社会生活にまでポジティブな効果をもたらすことができると示す必要がある。かつてのように教えのすばらしさを喧伝することや信者の獲得に力を傾注するだけでなく、その信仰実践によって到達できる個人的、集団的な精神的成長を、広く一般にも認知できる形で論理的にかつ科学的なアプローチをもって伝えられるようにしなければならないのである。

宗教的なものに限っても、人類の考え方は大きく進歩してきた。ライシテはその一例だが、20世紀の後半にはカルトが起こした問題によって、宗教への見方に大きな変化があった。今では人権の蹂躪や殺人を許容するような教えを奉ずる団体はカルトだと認識され、広く認知されている宗教団体とは一線を画しているはずだ。そして、暴力的な手段で自己の信条を主張するテロリストたちもまた、宗教の信仰者と呼ぶことはできない。

人を大切にするという教えを掲げる宗教は、その集団組織

の規模拡張や金銭的繁栄ではなく、平和と人命の尊重こそがその存在意義であると、頭の中で明確にかつ完全に意識できていると信じたい。もはや歴史を逆行しにして、特定の集団や個人の利益のために、戦争や人権侵害を直接的、間接的に容認するような愚かな間違いを繰り返すことはないはずだ。つまり宗教団体の世俗的な力が弱体化したことによって、逆に損得勘定を無視した精神世界の理想的な在り方に近づけていると思いたい。

今回のウクライナ侵攻後、宗教団体が何か行動を起こしているという事実は、まだ大きくは報道されていない。2月26日にローマ法王がウクライナ大統領と電話会談をし、「深く心を痛めている」と述べたとの報道があったぐらいだ。しかし、おそらくどの宗教団体も犠牲者に思いをはせ、それぞれのやり方でウクライナの平和を祈る時間を設けているはずである。例えば天理教は、ヨーロッパ出張所の提案で、2月27日のパリ時間10時から在欧の信者が異なる場所から同時刻にお願いづとめをつとめた。それらの対応の捉え方は個々人の見方によって判断が変わるだろうが、こうした平和と人命の尊重を最優先する行動を増やしていくべきだろう。戦争や紛争という痛みを経験した宗教はいま現在、教えと実践の本当の意味における一致が進みつつある最中だと考えたいところである。

このような書き方をすると、今更宗教に大きな働きはできないとか、考え方が甘いだとか、理想論だとか、平和ボケだとか言われるかもしれない。確かにそう言われても十分に反論できる根拠は持ち合わせていない。何しろ現実に関答無用の武力によって侵略される事実を目の当たりにしている現在、喫緊の課題は現場での防衛手段を強化することだと考えるのは自然なこととも言える。攻め込まれるとわかったら、対抗できる軍隊や兵器を備えるしかないと考えよう。先ほど述べたように、世界はいまだ人が争い続ける理由を追究し克服しきれていない段階にある。しかしながら、あらためて言うが、現代において人命と人権を尊重しない宗教団体は、宗教とは呼びがたい。つまり宗教団体を自認するならば、いくら非現実的だと言われても、持てる力を振り絞って非武装平和を謳い続けなければならないだろう。

フランスではライシテの進展によって、宗教は政治の表舞台から姿を消した。したがって宗教団体は、平和に貢献できる可能性を失ってはいないものの、直接的に戦争を食い止める手段を持たない。公的な役割を失ったのであるから、私的な領域で平和に貢献するしかない。私的な領域とは、家族や友人といった人間関係である。限られた空間でしか活動できないからこそ、これからの宗教はそこに力を注ぐべきである。そして、ごく当たり前のことなのだろうが、政治や外交のような大きな枠組みの中には、小さな人と人との平和なつながりが満ちあふれていなければならないのだと、今回あらためて思い返した次第である。